



## ノスリ若齢個体の越冬期の行動

内田 博

比企ワシタカ研究会・〒355-0017 埼玉県東松山市松葉町4-2-14  
E-mail: tori@po.kumagaya.or.jp

### はじめに

ノスリ *Buteo buteo* はユーラシア大陸に広く分布し、わが国でも本州、四国以北の低山地に生息し、繁殖している。しかし、冬期にはより南の地方や平地に移動をすることが知られているが(山階 1933, 森岡ほか 1995), 本種の冬期の行動についての詳しい報告はない。筆者は1羽のノスリの若齢個体を捕獲して、発信機を装着し追跡を行ない、若齢個体の冬期の生活についてデータを得たので報告する。

### 調査地および調査方法

調査は埼玉県の中央部の丘陵地帯で1996年12月から1997年1月にかけて行なった。この調査地の北側には西から東へ流れる荒川があり、南は標高60~100mのなだらかな丘陵がつづいている。また西は東秩父の山地に連なり、東は関東平野の平地につながる。この付近の荒川は河川敷幅は約1kmあり、河川敷内には畑やゴルフ場もあるが、ほとんどの部分はニセアカシア *Robinia pseudo-Acacia* やクヌギ *Quercus acutissima*, コナラ *Q. serrata* などの落葉広葉樹とカワヤナギ *Salix gracilistyla* などの灌木、ノイバラ *Rosa multiflora* やヨモギ *Artemisia vulgais* などの草本などが自生した荒地であり、水際には砂礫の裸地がある典型的な中流域の景観を保っている。丘陵地はコナラ、エゴノキ *Styrax japonica* などの落葉広葉樹と、スギ *Cryptomeria japonica*, アカマツ *Pinus densiflora* などの針葉樹が混じった混交林になっている。荒川と丘陵地のあいだには水田、畑、集落があり、丘陵地内にもパッチ状に畑や集落が存在する。この地域のノスリは9月から3月の秋から冬期に観察される冬鳥であり、繁殖の確認はない。ただし、調査地から西へ10数km離れた低山地帯から西では繁殖を行なっている。調査地の気候は冬期の積雪はほとんどなく、乾燥した晴天の日がつづくことが多い。

ノスリの捕獲は嵐山町古里の丘陵地内で、60×70cm、高さ60cmのカゴ罠をもちい1996年12月5日に行なった。捕獲した個体は、虹彩が淡黄色で、翼や尾などの帯斑が細く不鮮明であり、測定値は自然翼長356mm、尾長201mm、全長455mm、体重710gであった。これらの特徴から雄の幼鳥であると推定した(山階 1933, Baker 1993)。

2000年11月29日 受理

キーワード: 環境利用, 行動圏, 若齢個体, ノスリ

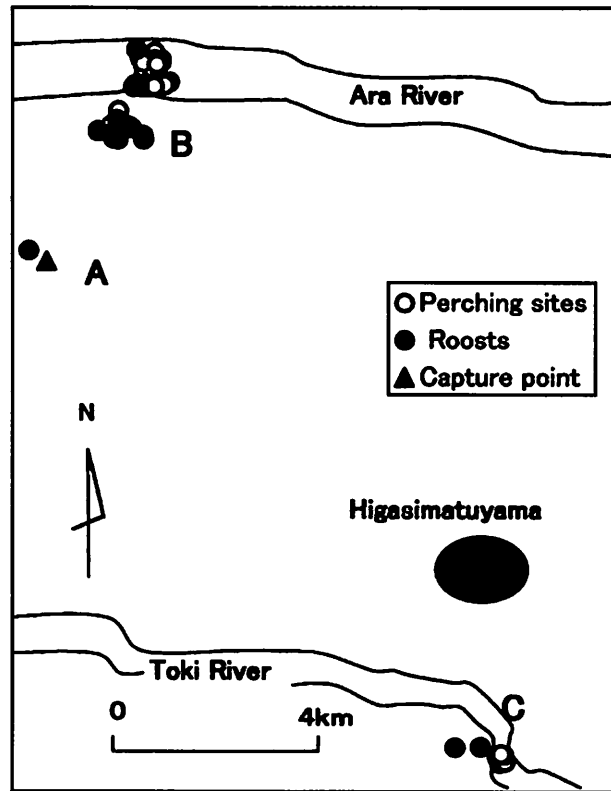


図1. 追跡個体のとまり場およびねぐら場所の分布

A : 12月5日捕獲地点とねぐら, B : 12月8日~30日, C : 1月16日~18日

Fig. 1. Distribution of perching points and roosting points of the Buzzard.

A : 5 December : Capture site and roost. B : 8-30 December. C : 16-18 January.

この個体には個体識別用の色足環と環境庁の金属足環を着けると共に、尾羽にテールマウント法で発信機を装着した。この発信機は140MHz帯のATS社製のもので、発信機の角度によって発信間隔が変化するアクティブスイッチが付いていて、電池寿命は150日である。

追跡した期間は1996年12月5日から翌97年1月18日までの44日間である。調査は期間内に日中数時間の追跡を10日前後の間隔で4回、夜間のねぐらの調査は不定期の間隔で15回行なった。

## 結果

12月5日に嵐山町古里の丘陵地内でノスリの若齢個体を捕獲した。放鳥後、ノスリは捕獲場所の近くの林内でねぐらをとった(図1中のA)。

12月8日以降12月30日までの調査は終日追跡を1回、数時間の追跡を2回、ねぐらの調査を12回行なったが、この間は捕獲した丘陵地を離れ、北東へ3kmの距離にある丘陵地と平地

との境になる丘陵地端のスギ林にねぐらをとり、図1中のBの範囲が行動圏となっていた。

この個体がB地域に滞在した12月8日から12月30日までに得られた、ねぐらおよび日中行動圏の最外郭内面積は1.4km<sup>2</sup>であった。この行動圏は丘陵地から集落部、河川、車の通行量の多い橋を含む荒川の河川敷にかかる範囲で、南西から北東へ約2 km、東西の幅が広い部分は1.2kmで細長い形を呈した。

12月31日の調査時に追跡個体の行方が判らなくなり、翌年の1月15日までは、B地域を中心に半径5 kmの範囲を探索したがみつからなかった。

その後、B地域の中心部から南東に約12km離れた東松山市高坂の丘陵地で1月16日に再発見した。発見後、1月16～18日までの3日間にねぐら調査を2回、日中2時間の調査を1回行なった。日中の観察では、追跡個体は荒川の支流の都幾川河川敷内で採食していた。都幾川の河川敷幅もこの付近は500 mあり、落葉木の林と灌木、やぶなどの荒地や畑などがパッチ状に散在している場所である(図1中のC)。以降3月まで調査は行なわず、調査を行なった3月には確認できなかった。

12月19日の終日調査での行動は、丘陵地のスギ林に前日からねぐらをとっていたが、日の出2分前に離峙して、ねぐら付近の荒地で採食したのち、ねぐら場所から900 m離れた河川敷まで移動した。この離峙時刻には同じ林からもう1羽のノスリが、より上流の河川敷方向へ飛んでいった。追跡個体は河川敷内で日中は食物を探索し、日没26分後に前日のねぐらから280 m東に離れた丘陵地のスギ林内に就峙した。この日の活動時間は10時間13分で、移動回数は80回、行動圏の最外郭内面積は0.69km<sup>2</sup>であった。日中の採食行動は川岸に自生しているニセアカシアの林で数mの高さの枝にとまり、数十秒から数十分のあいだ、周囲に獲物がいるかどうか探索し(7 ± 10分, Max 52分, N = 80)、数十mから400 mくらいの距離を移動(104 ± 85.97 m, Max 470 m, N = 78)して、再び探索するという行動をくりかえした。1日に捕食を試み地上に降下した回数は17回であり、すべて、とまり場の近くの地上へ飛び降りたものだった。捕食する現場は観察できなかったが、この河川敷にはアカネズミ *Apodemus speciosus*、ハタネズミ *Microtus montebelli* などのネズミ類が林地や畑などとの境の荒地に広く生息していて(斎藤・町田 1998)、それらを捕食しているのではないかと考えられた。この個体は7:58から川の右岸の狭い河川敷の林で過ごしていたが、10:31に川を横断して広い荒地のある左岸に移動し、採食行動を行なった。しかし、30分ほどで、眼の虹彩色が黒褐色の成鳥と思える別個体に追われて右岸に戻り、その後は就峙時まで右岸の狭い河川敷で採食していた。このような他個体に追われる状況は、12月10日の調査時にも観察され、追い払いに来た個体は、近くで威嚇するように鳴いた。

この個体の就峙場所は12月から1月の全調査期間内に15回調査したが、内14回は、日中採食をしていた採食地に近い丘陵の端のスギ林やアカマツ・スギ混交林などの針葉樹林内であり、残りの1回は採食地の河川敷内のやぶであった。ねぐらをとった場所は日毎に数百 m 移動した(649.7 ± 585.7 m, Max 1887 m, N = 8)。

## 考 察

調査地のノスリは秋から冬の越冬期にみられる鳥で繁殖はしていない。追跡をした個体は12月から1月までしか調査しなかったため、どこから来て、どこへ行ったか不明であるが、調査地では夏期にはみられなくなるため、夏期も留まったとは考えられない。追跡を始めた12月には丘陵地での確認であったが、その後は数km移動して、日中は荒地のある河川敷で採食し、夜は丘陵の端の林に戻りねぐらをとっていた。また、1月の滞在場所も広い荒地を持つ河川敷であり、そこでも夜は丘陵の林でねぐらをとっていた。ねぐら場所は毎日移動していてスギ林など茂った針葉樹林にとられていた。ねぐらと採食場所とを往復するのは、採食場所である河川敷内にねぐら場所となる、茂った林がないためと考えられた。

ノスリのおもな食物はネズミ類や鳥類などであるが(Cramp 1977, 米川ほか 1995, Iwami 1996), 調査中の捕食行動は地上への降下で、鳥類を追跡して捕らえるような行動は観察されなかった。移動性の高い鳥類と違って、ネズミ類の移動性は低く新たな供給は制限される。また、冬期では夏期に利用している鳥類の巢内ビナはいなく、は虫類、両生類、昆虫類などは活動しておらず、ほとんど利用できない。したがって、追跡個体が利用していた河川敷のような狭い荒地よりも、広い荒地の方が好適な場所と考えられるが、追跡個体は採食場所として河川敷の狭い一部を占有しているだけで、より広い荒地のある部分にはあまりいかなかった。ノスリは越冬期には単独の採食なわばりを持つことが知られているが(Cramp 1977, Sylvén 1978), 若齢の個体には、観察されたように先住者である成鳥などとの競争に負けてしまう結果、良好な採食場所は占有できないと考えられる。

Sylvén (1978) によれば、南スウェーデンでは冬期に繁殖個体は同じ場所に留まるが、なわばりの空白域には移入個体がなわばりを接するように生息ようになる。生息地内の採食環境は刈り取られて間もない牧草地がおもに利用されている。なわばりの広さは1 km<sup>2</sup>以下であるが、冬期の移入個体も繁殖つがいのなわばりも同じような広さである。この冬期の移入個体の年齢は記載されていないが、冬期のなわばりに戻る個体は同じ個体のことが多く、成鳥が同じ場所を占有していくものと考えられる。南スウェーデンでは冬期も1 km<sup>2</sup>以下の面積で生息が可能であるようだが、調査地での食物資源量の調査は行なっていないのでわからないが、環境が違うため、食物資源量には違いがあると思われる。

調査地の採食環境は河川敷であり、堤防内は荒地と畑地、林地がパッチ状に分布している。斎藤・町田 (1998) によれば、ノスリの食物であるネズミ類は、畑地、林地付近の荒地に多く、同様な環境には同じような密度で生息している。追跡個体の河川敷内での主な採食地域は荒川の右岸の狭い地域で、丘陵部分を合わせると行動圏は1.4 km<sup>2</sup>で南スウェーデンのなわばりの範囲より広い。しかし、採食可能な場所をみると、採食に不向きな集落部や、通行量の多い橋が中央を通り、人との接触が多く、また、ほかの個体の干渉などがあり、安全に採食できる地域は0.4 km<sup>2</sup>程度になる。狭い採食地域は食物資源の枯渇あるいは採食効率の低下を招き、長期の滞在は生存に不利と考えられることや、他個体の干渉を避け、より良好な越冬場

所を探すために、ノスリの若齢個体は比較的短期間に越冬期の滞在場所を移動して行くのではないだろうか。

この調査の対象はたった1個体であるため、推定の域を出ない。ノスリの冬期の行動を明らかにするには、多くのデータの集積が必要であり、この報告が一助となれば幸いである。

この報告をまとめるに当たり、捕獲に協力をしていただいた比企ワシタカ研究会の高柳茂、石松康幸、田中功やほかのメンバー、発信機の入手に便宜をはかってくれた遠藤孝一、また文献を快く送って頂いた岩見恭子、加藤夕佳、斎藤貴、佐藤伸彦の諸氏にお礼申し上げる。

### 要 約

埼玉県の中央部の丘陵地で、ノスリの幼鳥個体1羽を捕獲し、発信機を装着して冬期の2か月間、追跡を行なった。ねぐらは丘陵地の針葉樹林内であったが、おもな採食場所は河川敷であった。12月8日から30日までは1.4km<sup>2</sup>の範囲内で採食しているのが観察されたが、その後、この周囲では電波が受信されることはなくなり、1月16日に12km離れた地域で発見された。若齢の個体では良好な採食場所を占有できないため、移動したものと思われた。

### 引用文献

- Baker, K. 1993. Identification Guide to European Non-Passerines. BTO Guide 24: 176-179. British Trust for Ornithology, Thethord.
- Cramp, S. (ed). 1977. Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa. Vol.2. pp. 177-190. Oxford Univ. Press, Oxford, London & NY.
- Iwami, Y. 1996. Some Prey Items of Three Species of Hawks (Goshawk *Accipiter gentilis*, Sparrowhawks *A. nisus* and Buzzard *Buteo buteo*) in Tokachi District, Eastern Hokkaido. Jpn. J. Ornithol. 45: 37-38.
- 斎藤貴・町田和彦. 1998. 江南町史自然編1 動物. pp. 115-142. 江南町, 埼玉.
- Sylvén, M. 1978. Interspecific relation between sympatrically wintering Common Buzzards *Buteo buteo* and Rough-legged Buzzards *Buteo lagopus*. Ornis Scandinavia 9: 197-206.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 日本のワシタカ類. pp. 502-508. 文一総合出版, 東京.
- 山階芳麿. 1933. 日本の鳥類とその生態 第2巻. pp. 768-773. 梓書房, 東京.
- 米川洋・川辺百樹・岩見恭子. 1995. 十勝地方平野部におけるノスリ *Buteo buteo* の繁殖生態と繁殖個体群の減少要因. ひがし大雪博物館研究報告 17: 1-14.

## Home range of a wintering young Buzzard tracked by radio-transmitter

Hiroshi Uchida

Hiki Raptor Research Group. Matsuba-cho 4-2-14, Higashimatsuyama, Saitama 355-0017 Japan

A young Buzzard *Buteo buteo* was captured at Saitama, central Japan on 5 December 1996, and a radio-transmitter was attached to the tail. It was tracked until 18 January 1997. It roosted in coniferous forests and searched for prey over grasslands along a river. It was observed within a 1.4km<sup>2</sup> area during 8-30 December. However, after the end of the year, no transmissions were received from the buzzard in that area. It was observed again on 16 January at another area of grassland 12km along the river from the previous location. Both grassland areas were small. So the young bird probably changed foraging sites because of a lack of food. It is thought that the young buzzard could not occupy good foraging sites because such sites were occupied by other adults, and thus changed its own foraging sites frequently.

*Key words:* Buteo buteo, habitat-use, home-range, wintering site